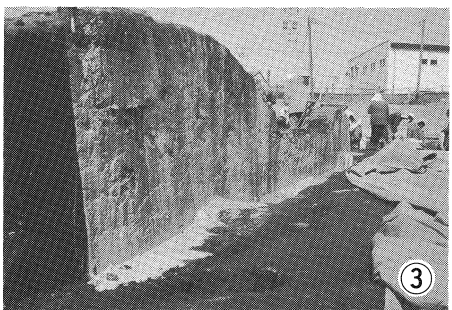
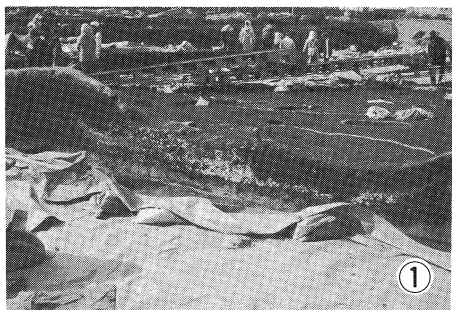


埋蔵文化財 愛知

No. 6



住居跡断面の土層転写

本センターでは、保存処理業務として、せい弱な遺物の保守・管理・処理および遺構の取り上げの作業を行っています。写真は朝日遺跡で実施した住居跡断面の土層転写の過程です。（7ページに関連記事記載）

シリーズ 朝日遺跡を語る

「生活と道具」

紀元前2～3世紀に、水稻耕作を主要な生産基盤とする弥生文化が北九州に始まり、短期間にこの伊勢湾地方にも到着した。朝日遺跡において、この文化がどのように受け入れられていったか、以下、特に生活の道具を中心にその様相をみていきたい。

土器

朝日遺跡では、土器の形態の変容や文様の類似性からみて、弥生時代全般を通じて西日本からの強い影響がある。ただし、弥生時代に新たに成立した壺は影響を受けやすく、縄文時代より既に存在していた甕は影響を受けにくい傾向がある。壺は、その初期より西日本からの影響下にあり、前期の遠賀川式土器の波汲、中期初頭における畿内第Ⅱ様式の櫛描横線文の波汲、中期末における畿内第Ⅳ様式の凹線文の波汲などにみられるように、畿内地方の動きに大きく左右される。ただ、それらの影響が途切れるところで、細頸壺に施される磨消帯のように在地的な様相を示すものが現われる。一方、甕は形態・文様とも在地的な特徴を示しやすく、中期には、縄文土器の系譜をひく羽状条痕を施したものと西日本的な甕が並存し、後期になり縄文時代の影響が薄れた後でも、在地的な台付甕が主流を占めていく。

工具

石斧は、昭和54年度までの調査で伐採斧（太型蛤刃石斧）260個（58%）、加工斧（柱状片刃石斧・扁平片刃石斧）192個（42%）が出土している。伐採斧と加工斧は木器を作るためには、両者共に必要である。上記の比率は、中期中葉までの他遺跡の例と近いようであるが、中期後葉以降になると加工斧の比率が下がり、鉄斧への転換が考えられている。朝日遺跡では、鉄器化の過程を追える資料の出土例が少ないため、変遷をたどることはできないが、後期の山よこおの中式期の溝から鉄斧装着痕のある横斧ひざえの膝柄（加工斧として使用されたか）が出土しており、

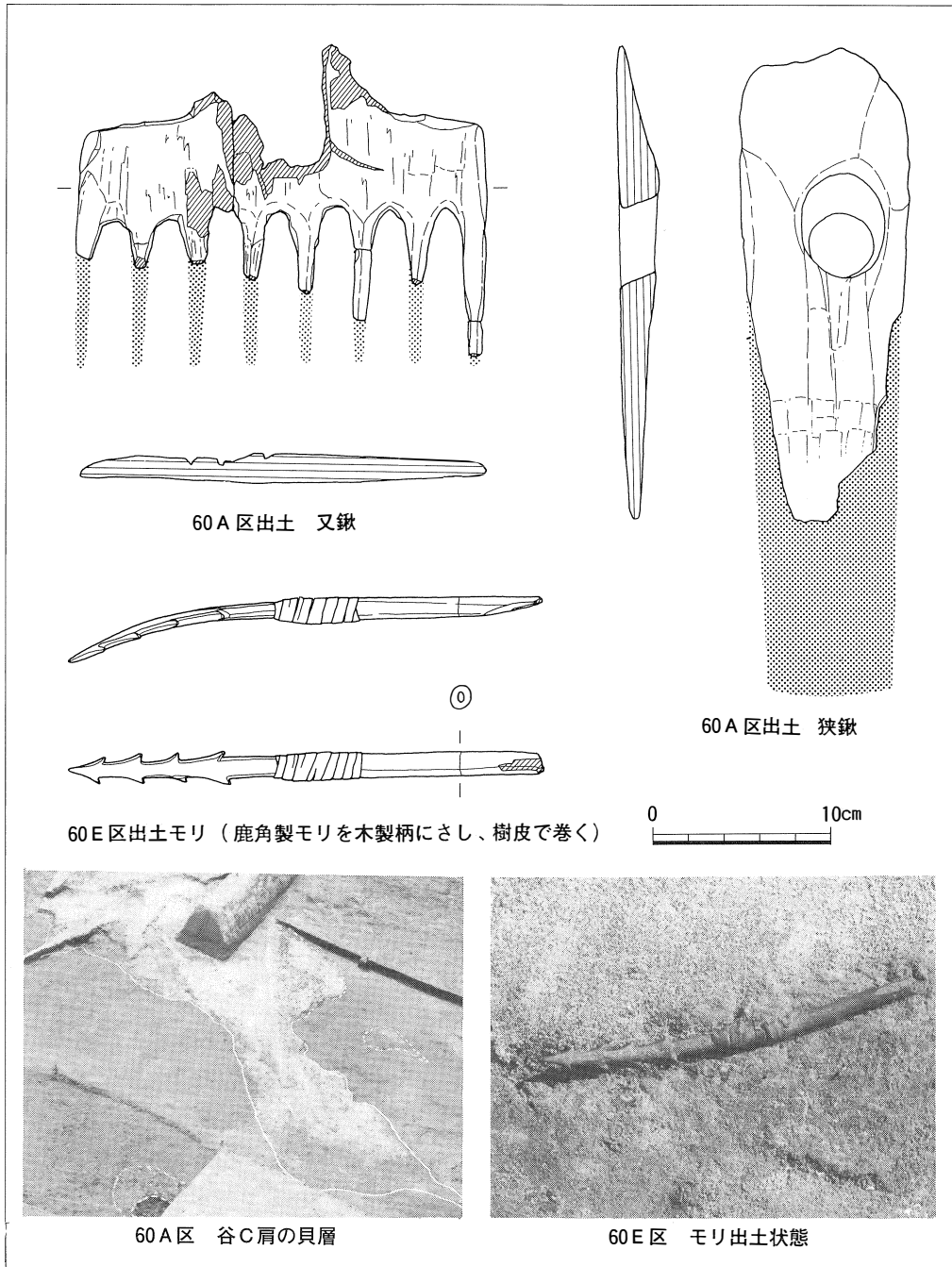
この時期から加工具は鉄器化していた可能性が高いものと考えられる。また、たたきいし 敲石・すりいし 磨石は1440点出土しており、その量の多さからみて、食生活における伝統的な調理方法（粉食）に対する依存度が高かったことがわかる。

農具

朝日遺跡での石包丁の少なさは早くより指摘されているところで、昭和54年度までの調査によれば、28点しか出土していない。さらに、それに代わると思われる石小刀・石鎌の出土例も極めて少ない。くわ 鋤・すき 鋤については、昭和60年度の調査までに、狭鋤7点、広鋤6点、またぐわ 又鋤1点、鋤7点が出土しており、狭鋤・鋤が開墾土木用に使われたと考えれば、現状では大集落の農具の出土量としてはいささか寂しく感じられる。（鋤については、水田耕作にも使用されたと思われるが、土を掘るという機能を考えれば、水田専用のもではなく、開墾も含めた土木用とした方がよいと思われる。）

狩猟・漁撈具

昭和60年度の調査で、谷Cの南側斜面のほぼ全域にわたり、厚さ約50cm、幅約15mの朝日式期に属する貝層の堆積が検出され、膨大な量の採集・消費の状況が推測された。これは、この時期まで縄文時代以来の伝統的な貝類の採集に大きな比重がおかれていた証拠であり、漁撈錘の出土例の少なさ、釣針・ヤス・モリの出土例の豊富さからみて、遺跡周辺の環境が、遠浅の砂浜か干潟であったことが推定される。狩猟の道具としては石鎌があるが、中期以降は、前期には減少していた縄文的な伝統をひく有茎の五角形鎌（いわゆる飛行機鎌）が増大する。石鎌が狩猟用か武器用かは明確な区別が困難であるが、狩猟に使用された例として、石鎌（凹基無茎形）がささったままの鹿の腰骨が出土している。また武器としては、中期中葉から後葉にかけて尖頭器状の大型有茎鎌において、その可能性が考えられる。



まとめ

以上、主な道具についての様相を述べた。朝日遺跡では弥生文化を受け入れながらも、そこにはなお縄文的な伝統を強く残しているといえよう。このことは、ただ単に朝日遺跡が縄文文化と弥生文化の接点に位置したための中間形態・

折衷形態の「ムラ」と考えるだけでは十分といえないことを示している。縄文・弥生文化の要素が朝日「ムラ」の生活の中にもどのような形で受け入れられていったかを、今後考えていかなければならないであろう。

(宮腰健司)

市町村だより

広久手第6号窯

瀬戸市教育委員会

ひろくて
広久手第6号窯は、瀬戸市宮地町104番地に所在する。この窯跡を含む広久手古窯跡群は、矢田川南部の低丘陵地帯に位置しており、鎌倉時代を中心とした古窯跡が、この窯跡も含めて16基確認されている。

この窯跡は、丘陵頂部付近の南西斜面、やや谷状となる部分に構築されており、標高は135mである。窯体は、分炎柱を有する窰窯で、確認された全長は5.6m、焼成室での最大幅は1.7mを測る。遺存状態は、焼成室が極めて悪く、全体の1/3程度しか残っていない。しかし、分炎柱付近から燃焼室・焚口にかけては比較的良好に遺存しており、分炎孔は左右共にほぼ完全な状態で検出されている。床面は、燃焼室から傾斜が始まっており、分炎柱付近でやや傾斜

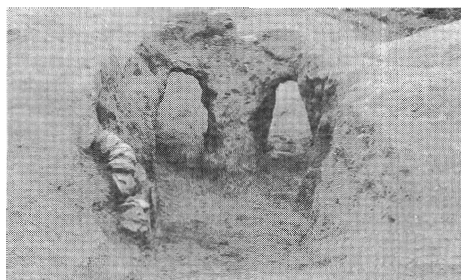
を強め、焼成室では約20°の傾斜となる。

出土遺物は碗・小皿・片口鉢等であり、瀬戸窯における山茶碗編年によれば、13世紀中・後葉にあたる。この内、片口鉢は前庭部最上部の灰層に、数個体まとまって出土しており、窯操業期間の最終時期に限って焼成されたと考えられる。

この窯跡の調査は、本年3月から5月にかけて行われ、現在瀬戸市歴史民俗資料館で整理作業中である。

(瀬戸市歴史民俗資料館

文化財調査員 服部郁)



日向山古墳

額田郡幸田町教育委員会

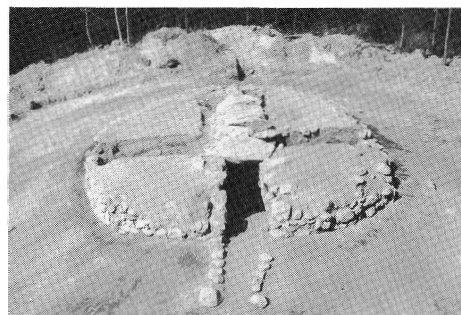
ひむかやま
日向山古墳は、額田郡幸田町深溝地内の日向山の頂上部（標高約77m）に位置する。この古墳の発掘調査は、日向山の土地開発計画に伴う事前調査として、本年2月8日から3月11日までの期間で行われた。

この古墳は、墳丘中腹に高さ約1mの外護列石を巡らせた円墳で、墳径約13m、墳高約3mである。古墳の主体部である石室は、比較的良好に残っていたが、天井石の一部は動かされたり撤去されていた。したがって、過去何回かの著しい盗掘を受けたと思われる。石室は堅穴系横口式石室と呼ばれるもので、石室入口部より玄室までは落差約1.4mのスロープ状の通路で導かれており、遺骸の安置された玄室へは、「下りていく」という感じの構造である。石室の規模は、全長約6m、幅約1.8m、高さは玄室内で約2.2mである。玄室奥には、板石3枚を使っ

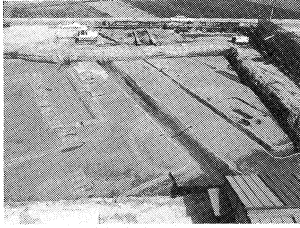
かんたい
た棺台が設けられている。棺台は床より約40cm高くなっており、奥壁、側壁に接している。遺物は、石室内より碧玉製管玉1点と須恵器片数点、前庭部墓道より完形の坏身1点、墳丘より須恵器片・鉄製馬具片等が出土した。遺物や石室構造などから、築造は6世紀前葉と推定される。

この古墳は、堅穴式と横穴式の過渡期にあたる堅穴系横口式の様相を顕著に示す好例の古墳で、三河あるいは東海地方の古墳文化の発達を考える上で重要な資料となるであろう。

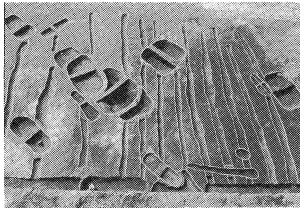
(蒲郡市郷土資料館学芸員 小笠原久和)



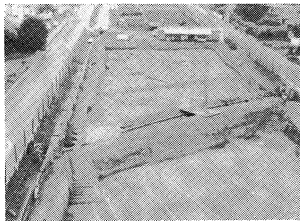
発掘ニュース

**阿弥陀遺跡**

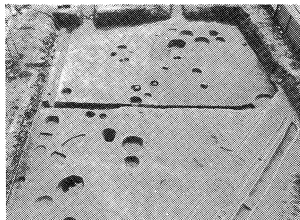
4月から6月にかけて発掘調査を実施。遺溝は上下二層に分かれる。上面において室町時代の屋敷地および「L」字型の大型土坑を検出。この土坑は県下において類例をみない形態・規模のもの。下面においては弥生時代中期の環濠集落の外縁部を検出。

**土田遺跡**

4月から5月にかけて発掘調査を実施。発掘区全域にわたって、主軸に一定の方向性のみられる方形土坑を34基検出。さらに東南砂堆部分で、南東から北西にかけて溝16条を検出。遺物は中世の山茶碗・山皿・古墳時代前半の土師器が少量出土。

**清洲城下町遺跡**

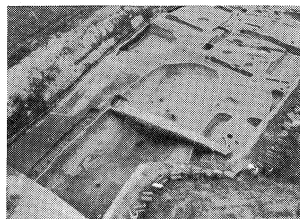
4月から6月にかけて発掘調査を実施。発掘区の中央付近で、「清須村古城絵図」（蓬左文庫所蔵）にみられる「水堀」に相当すると考えられる16世紀末～17世紀初の大溝を検出。この大溝からは軒丸瓦や軒平瓦などの瓦類が多く出土し、鯺瓦しやちほこがわらも1点出土。

**廻間（松ノ木）遺跡**

4月～5月にかけて、昨年度の北東にあたる区域の発掘調査を実施。検出された遺構は、古墳時代前期～14世紀にかけての旧河道と、鎌倉時代の井戸1基、清洲城下町の時代の井戸15基とそれに伴う土坑15基、溝3条。

**朝日遺跡（C、D区）**

4月～7月にかけて発掘調査を実施。弥生時代中期末と同後期の方形周溝墓を各2基ずつ検出。中期末の方形周溝墓から主体部・土器棺を、後期の方形周溝墓からガラス玉を検出。D区で検出した後期の3条の溝は環濠の一部をなすもので、集落への入口部に相当するものと思われる。

**朝日遺跡（N、T区）**

4月～6月にかけて発掘調査を実施。N区では弥生時代の方形周溝墓5基を検出。また弥生時代中期初頭の住居跡を確認。T区では弥生時代の方形周溝墓7基を検出。このうちの一基の周溝上層からは多量の土師器が検出された。

遺跡紹介

勝川遺跡

勝川遺跡は、国鉄中央線勝川駅の南西約650m付近（春日井市勝川町5丁目）を中心とする約12万㎡の広がりをもつ遺跡であり、地形によって、鳥居松段丘面上で国鉄中央線東側の南東山地区、西側の上屋敷地区、沖積低地の苗田地区に分けられる。この遺跡の調査は、春日井市教育委員会によって昭和5年から勝川廃寺範囲確認調査が行われ、また、財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部によって昭和56年から名古屋環状2号線・国鉄瀬戸線建設、土地区画整理事業等の事前調査が行われ、既に多くの成果が報告されているが、その概要は、次のとおりである。

勝川遺跡は、4時期に大別される。

I期 弥生時代中期。南東山地区の居住域（竪穴住居群）と上屋敷地区の墓域（方形周溝墓群）、

苗田地区の生産活動域（水田）が結びつき、ムラを構成していた。

II期 弥生時代後期～古墳時代。前期には南東山地区の居住域は盛期を迎えるが、後期には衰退し、居住域内にも墓（南東山古墳）が築かれる。上屋敷地区の造墓活動は活発化する。また、周辺に勝川古墳群が形成された。

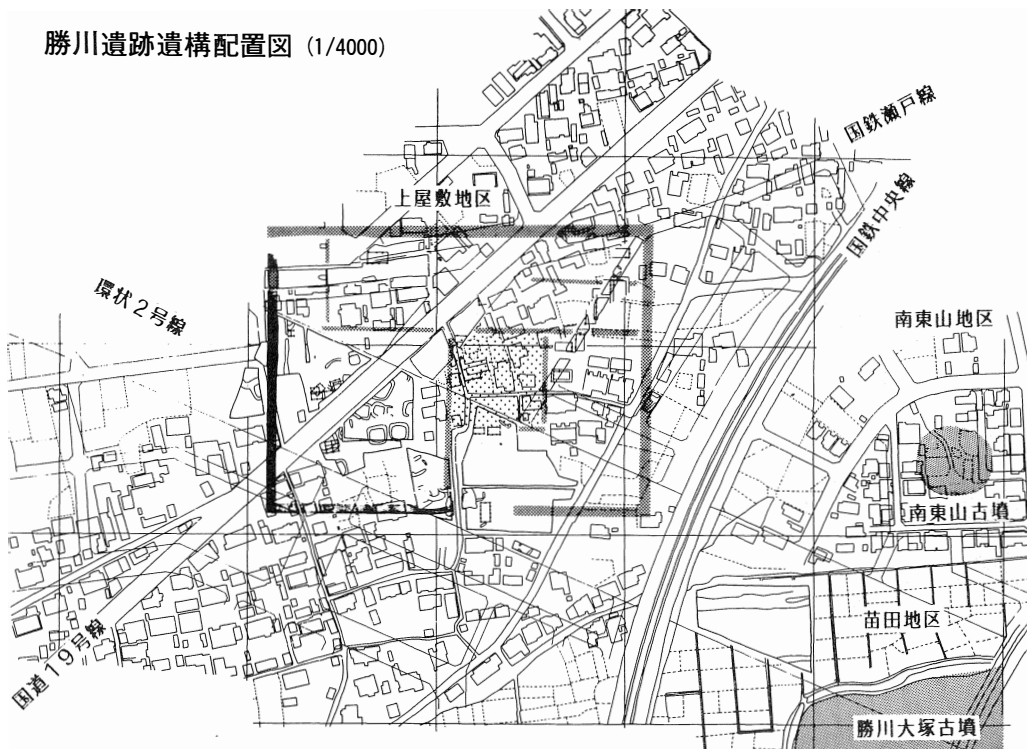
III期 奈良・平安時代。南東山地区には住居は築かれず、上屋敷地区は大規模な整地の後、寺が建立され、竪穴住居群や掘立柱建物群も建てられた。

IV期 江戸末期～明治初期。下街道に沿う宿場町としての町屋が形成された。

なお昭和60年度は、本センターが「勝川廃寺」区画内の発掘調査を実施したので、「廃寺」についての今までの成果の概略をまとめると、西、南大溝の検出によって寺域は東西188m、南北148mと推定され、伽藍配置は不明であるものの主要伽藍が寺域中央やや東寄りに存在するらしく、「勝川廃寺」の輪郭が把握できたといえよう。

（松原隆治）

勝川遺跡遺構配置図 (1/4000)



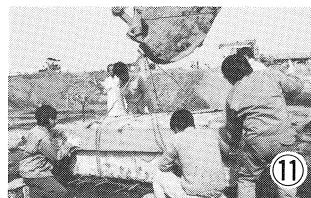
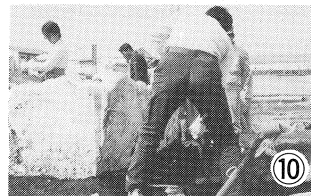
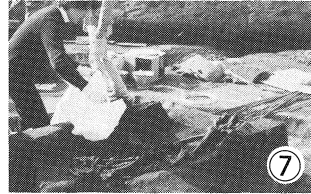
保存処理レポート

朝日遺跡における土層転写と人骨取り上げ

合成樹脂を使用する土層転写、遺構、遺物の取り上げ方法は、近年有効な記録保存方法として、また展示のための方法として、各地で多大な実績をあげている。本センターでは、奈良国立文化財研究所の研修成果を踏まえ、保存処理業務の一貫として、住居跡断面の転写、方形周溝墓埋葬人骨の取り上げを行った。以下、それらの作業の過程と問題点について述べる。

土層転写 朝日遺跡60B区S B 11の土層断面、長さ約9 m、高さ約60cmについて61年2月に転写を行った。S B 11は弥生中期の竪穴住居で、埋土・地山ともシルト質、埋土中に破碎貝の層がみられる。1. - まず転写面を平滑にし、突出する土器片等を取り除く(本紙1ページの写真①)。2. - 断面に強い接着力をもつ合成樹脂トマックNR51+アラルダイトHY837+シンタロン#370を刷毛により塗布する(同②・③)。(湧水地であるので、断面硬化のためサンプルンWEの塗布も考えたが、今回は冬季乾燥中であつたため、使用しなかった。) 3. - 1時間ほど後、断面をさらに硬化するため寒冷紗を張りつけ、その上に2の合成樹脂を再度塗布する(同④)。4. - 通常は3~12時間で硬化するのであるが、極寒期であつたためか、1日以上かかり、剥ぎ取りは翌々日に行わざるを得なかった。作業は上部よりスコップ等で切れ目をいれると簡単に剥ぎ取れ、貝層の付着も充分であつた(同⑤)。横幅が長いため、5分割して取り上げた。5. - 剥ぎ取り後、余分な付着物を除去するため水洗する(同⑥)。また、欠落部分については、該当する土を持ち帰り、エポキシ系接着剤で接着した。

人骨の取り上げ 朝日遺跡60C区SD01の第2主体・第3主体部出土の人骨について、取り上げ作業を行った。1. - 人骨を湿らせた和紙で覆い、緩衝剤としてコピックを充填する(⑦・⑧)。2. - 周囲をベニヤ板で囲い、発泡硬質ウレタンを注入する(⑨)。3. - 硬化後、底部に鉄棒を打ち込み、土を分離させ、運搬する(⑩・⑪)。こ



の時点で第2主体については、基盤が砂質土で軟弱であつたこと、中央部にサブレンチが設定され2つに分離しかつていたことなどから、出土時の状態のままでは運搬不可能となり、部分的に取り上げざるを得なかった。4. - 第3主体については、底部の土を除去し、合成樹脂(FRP)で裏打ちした後、反転させ上部のウレタン・土を除き、主体部を露出させた。

(宮腰健司)

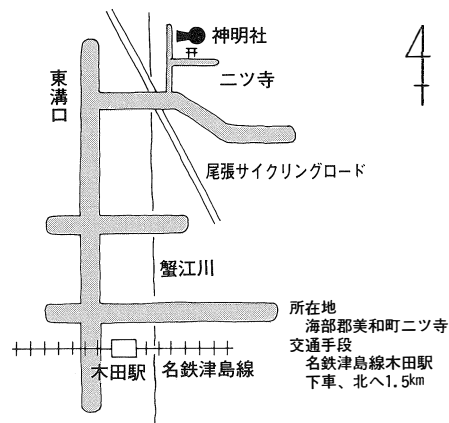
史跡散歩No. 4

二ツ寺神明社古墳

— 海拔零メートル地帯の大型古墳 —

木曾・長良・揖斐の三大河川が合流する濃尾平野は、その下流に広大な湿原地帯を形成している。古墳時代初頭、新しい文化の波は、西から東へすさまじい勢いで波及した。従来、濃尾平野への古墳文化の到来は、山麓の道沿いに展開する巨大な前方後円（方）墳の動向をもって推測されていたのであるが、近年海拔零メートル地帯・河口部に重要な遺跡が多く存在することがしだいに明らかになってきた。その一つが二ツ寺神明社古墳である。現在は美和町二ツ寺集落の西端に存在する「神明社」、となっているが、全長約80メートルの前方後円墳である。後円部には本殿が鎮座するものの、比較的よく墳形が保存され、特に北斜面の状況はきわめて良好で、前方部が低く狭長で、先端が拡張する

古墳時代前葉の特色をよく残している。県内でも最古の前方後円墳の一つであるとともに、湿原最大の規模を誇る。古墳文化の濃尾平野定着を物語るきわめて重要な古墳として、その学問的価値はますます高くなっている。まさに湿原の覇者の「奥城」^{おくつき}（墓所）にふさわしい景観を見せているのである。



理事・専門委員の異動

<理事>

辞任 6月30日 伊藤 芳

就任 7月1日 栗木茂一

(町村教育長協議会会長)

<専門委員>

就任 7月1日

岩 石 学 諏訪兼位 (名古屋大学教授)

木材組織学 木方洋二 (名古屋大学教授)

のやきもの——清洲・名古屋の出土品——展に、清洲城下町遺跡・朝日西遺跡・勝川遺跡出土の遺物を出陳。

7/5～8/10 名古屋市博物館の、愛知の新出土品展(Ⅱ)に、朝日遺跡・清洲城下町遺跡出土の遺物を出陳。

7/16～18 市町村職員発掘調査技術等研修会<基礎研修会>を開催。文化庁主任文化財調査官 河原純之氏等による講義と、朝日遺跡の発掘現場の見学を行った。

センター日誌

来訪者

6/3 藤岡町教育委員会 6名

6/13 清洲町文化財講座 見学39名。

記録

6/12 昭和61年度第1回理事会開催

〃 専門委員会議開催

6/29～9/28 愛知県陶磁資料館の、城下町

<現地説明会開催状況>

5/31 朝日遺跡(C・D区)参加者約120名

埋蔵文化財愛知 No. 6

発行 昭和61年9月
編集 (財)愛知県埋蔵文化財センター
〒450 名古屋市中村区名駅二丁目44番5号
名駅パークビル9F
TEL 052-586-3155
印刷 東海プリント